

国家資本主義と競争するには

－成都・北京・上海で考える－

開倫塾

塾長 林明夫

Q：1か月に2回、中国に行ったそうですね。中国には何をするために行ったのですか。

A：(林明夫：以下省略)第1回目は、10月17日から22日まで公益社団法人経済同友会中国委員会の2011年度中国ミッションに参加し、四川省の成都と、北京を訪問しました。中国委員会委員長の石原邦夫東京海上日動火災保険取締役会長の団長以下、団員21名、随員25名の大デリゲーションでした。

今年の6月に全日空(ANA)が成田から成都までの直行便を開設したので、乗り継ぎなしでも助かりました。

中国西部を代表する省の一つである四川省の人口は9000万人を超え、すぐ隣の人口2000万人を超えた重慶と合わせると、日本の人口に迫り、もうすぐ追い抜く勢いの地域でした。

中国政府は、上海はじめ沿海部との地域経済格差是正のため、西部開発を国家戦略の一つとして決定。四川省が中国の地域格差是正、西部開発の取り組みの中心地となっています。

四川省の省都、美しい花の都の成都には地下鉄がまだ1本しかありませんが、2020年までに約20kmの地下鉄を10本にまでする計画のようです。

いろいろな事件が伝えられてはいますが、高速道路網や新幹線網、飛行場、上下水道、電力や通信など社会的インフラの整備はかなり進み、成都をはじめ四川省の都市の基盤整備は計画通り超ハイスピードで進みつつあるようです。

Q：社会インフラ整備のスピードが極めて速い理由は何ですか。

A：中国政府が高い経済成長率を背景に、この時とばかり国家資本主義を徹底的に推し進めているからだとは私と考えます。

ゆるやかな形で反政府の言論を規制しながら、中国国民の一人あたりの所得の大幅向上(具体的には所得倍増、倍々増)を目指し、経済活動の自由を最大限に認容しているためと考えます。

経済活動の推進には、社会インフラ、特に都市基盤の急速な整備が欠かせませんので、国家の存亡を懸けてこの四川省をはじめとする西部地区の都市基盤整備をしていると考えます。

Q：成都ではどこに行ったのですか。

A：四川大地震の跡地である英秀鎮(崩壊した中学校跡)や新設された中学校、都江區市長、西部国際博覧会、樂山市長、四川省人民政府黄小祥副省長、西部金融フォーラム、パンダ繁殖基地などです。パンダは可愛かったですね。

Q：北京では何をしましたのですか。

A：中国社会科学院の余永定氏らとの会議、前国務委員の唐家璇氏とのディスカッション、中国国

家発展委員会との意見交換、日本銀行北京事務所長新川隆一氏との懇談、それに経済同友会のお仲間でもあった丹羽宇一郎駐中国全権大使との懇談・会食などでした。

Q：北京で感じたことは何ですか。

A：欧州の経済危機がユーロ崩壊など極限状況に陥らない限り、中国経済の成長は 7 ～ 8%のまま続くかもしれないということでした。

今後、中国の企業が日本に進出を果たす際に、他の欧米企業と同様に投資の受け入れ環境を整えてもらいたいという政府要人からの希望表明は参考になりました。

Q：上海にはいつ行ったのですか。

A：11月7日から9日までの3日間、教育経営研究会の皆様と一緒に上海外語大学などを訪問しました。

10数年前に浙江省杭州市にある印刷会社の董事をしていたため、経由地である上海には度々立ち寄ったことがありました。10数年前とは大違いで、超近代都市の上海を実感しました。

なぜ OECD の PISA2009 年度調査で人口 3000 万人の上海が 3 つの学力分野で世界一の地域になったのかが、最大の興味・関心でした。

その理由は、公立であっても、学校長が優秀な先生を自力で確保でき、研修できること。

学校の先生の多くが、学校の休みの日は自分で塾を開き、徹底的に補習や受験指導を行っていること。(ちなみに、学校の先生は収入が高いため、超人気の職業だそうです。)

一人っ子の両親や 4 名の祖父母が外国留学や大学、大学院(博士課程まで)への進学を強烈に願い、全力でサポートしていること。

韓国や香港、シンガポールの小学生、中学生、高校生、大学生、大学院生と同様に、一族の願いをかなえようと極めて熱心に学び続けている結果かと考えます。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営幹部の先生方に考えて頂きたいことはありますか。

A：人口が 1 億人に近い四川省の教育サービスに対する需要はないかと言えば、そのようなことは「絶対はない」と考えます。

学校の先生が時間外にアルバイトを行っており、その月謝が夫婦の家計収入の半分以上である場合が多いと聞けば、我々にもビジネスチャンスがないとは言えないと考えます。

学習塾以外にも、職業訓練や専門学校など数多くの、また、何千万人もの、日本式のきめ細かな教育サービスの潜在需要は存在すると私には思えます。

是非、年に何回かは中国はじめ外国に出掛けて、未来を展望して頂きたく希望します。

Q：最後に一言どうぞ。

A：大豆生田実足利市長の依頼を受け、足利市経済活性化諮問会議の会長に就任。9月より来年8月まで、24名の委員の皆様と足利市の経済活性化の議論をスタートしました。

今までの経緯はともかく、現実を踏まえて超円高、国際競争力、少子高齢化、デフレに強い企業や地方都市づくりを議論したく思います。自らの勉強不足を痛感、勉強あるのみと密かに思っている毎日です。

－ 2011年11月20日記－